

ファンクショナルバイリンガル育成に向けた10年の歩み

京都府・私立 立命館小学校

2006年に開校した立命館小学校は、「真の国際人の育成」を教育方針に掲げ、独自の英語教育を展開している。小学校・中学校・高校の12年間を見据えた指導を行い、小学校は「ファンクショナルバイリンガル」の基礎を築く段階として、子どもの英語力の引き出しをたくさんつくる活動を行ってきた。教材と指導案をゼロからつくり上げ、改善を重ねてきた歩みは、教育委員会や公立校にも参考になると思われる。



◎ 2006（平成18）年開校。2つの大学、4つの中高一貫校、1つの小学校を有する立命館学園の1校。教育方針に「確かな学力」「真の国際人」「豊かな感性」「高い倫理観と自立心」の育成を掲げる。

校長 成山治彦先生

児童数 720人 学級数 24学級

電話 075-496-7777

URL <http://www.ritsumei.ac.jp/primary/>



副校長

蔭山成利

かげやま・なりとし

立命館慶祥中学校・高校副校長、学校法人立命館一貫教育部部長、立命館中学校・高校副校長を経て、2016年度から現職。



教諭

三ツ木由佳

みつぎ・ゆか

英語科主任。設置準備室の時から英語のカリキュラム開発に携わる。大学院では小学校英語授業のあり方を研究。

英語教育の目標

自分の必要に応じて英語を使える力の基礎を育む

京都市北部に位置する立命館小学校は、2006年の開校時から教育方針の1つに「真の国際人の育成」を掲げ、英語教育に力を入れている。その英語教育の目標は、立命館中学校・高校と連携した12年間一貫教育において、「ファンクショナルバイリンガル」と言える人材を育成することだ。蔭山成利副校長は次のように説明する。

「ファンクショナルバイリンガルとは、状況や場面に応じて、英語をツールとして使える人材という意味です。生徒の将来の夢や目標、また、高校卒業後の進路は多様です。それぞれの生徒が自分の必要に応じて、様々なシーンで英語をコミュニケーションの手段として使えるようになることを目指しています。小学校はその基礎を育む段階という位置づけです」

同校の設置準備室の時から在籍し、英語カリキュラムの開発を担当している英語科主任の三ツ木由佳先生は、次のように語る。

「今でこそ小・中・高で連携した教育が進められていますが、開校当初はどのような授業をするのか、全く決

まっていませんでした。本当に手探りで、あらゆる教材を集めましたが、そのまま使えるものはほとんどなく、結局作った方が早いと、夜遅くまで工作する日々が続きました。そして、子どもたちの反応を見ながら、『この内容は良かった』『この教材はここを作り直そう』と、同僚の先生方と試行錯誤を重ねました。まさに、今の立命館小学校の英語教育（図1）は、子どもたちから我々も学び、つくり上げてきたと言えます」

開校から10年を経て、同校の目標は具現化されつつある。2016年3月に立命館高校を卒業した同校の1期生*の中には、海外の大学に直接進学する生徒が現れた。

「オーストラリアの大学に進学する生徒は、自分が学びたいデザインについて教えてもらえる大学が外国にあることが分かった際に、英語で学ぶという不安を感じて選択を躊躇することはなかったとのことでした。それこそが、まさに私たちが目指してきた子どもの姿であり、ファンクショナルバイリンガルが本当に育っていることを実感し、感慨深かったです」（三ツ木先生）

同校の英語の授業時数は、低学年が週2コマ、中学年が週3コマ、高

* 2006年4月、小学1～3年生の児童で開校した。2009年度に全学年がそろった。

学年が週4コマだ。ほかに毎朝のモジュールタイムもあり、6年間で約600時間となる。担当教員は英語科専任で、日本人教員4人、ネイティブ教員5人が在籍する。そうした点は私立ならではの環境だが、授業の構成や教材作りの考え方は、公立校での指導にも生かせるポイントが多い。

授業の進め方

集中力が続くよう、短時間でテンポよく、多様な活動を

授業は、日本人教員とネイティブ教員のチーム・ティーチングで、1年生からオールイングリッシュで進める。その特徴は、1コマ45分間の中で4～7種類の短時間の活動をテンポよく行うことだ。例えば、歌を歌い、カードを用いたフォニックスを行い、前時に学んだ語彙を使ったクイズで楽しんだ後、絵本の読み聞かせをして、再び歌を歌うという活動が展開される。三ツ木先生は、子どもが最後まで集中して英語を聞き続けるための工夫が大切だと説明する。

「子どもに英語を聞く耳と聞く態度を育むために、教員はすべて英語で話し、大量にインプットするようにしています。しかし、子どもが45分間集中力を保って、母語ではない英語を聞き続けることは難しいものです。だからこそ、種類の異なる活動を短時間でいくつもを行い、子どもが気持ちを切り替えて、飽きずに学べるようにしています」

短時間でも、歌、音読、クイズ、ゲーム、ロールプレイなどの多種多様な活動があれば、子どもは得意な活動や好きな活動を見つけやすい。例えば、活動的なゲームばかりでなく、読み聞かせを行うことで、言葉に加えて絵の助けによって物語にぐっと入り込み、内容を理解できる子どももいるという。なおかつ、多様な活

図1 立命館小学校 英語教育の特色

| | | |
|---|---|--|
| 1 | 口頭での大量のインプット | 授業は日本人教員とネイティブ教員のチーム・ティーチングで、オールイングリッシュで進める。2人の教員が子どもに大量の英語を浴びせ、英語を聞く習慣と理解するストラテジーを育てる。 |
| 2 | 文字を音声化できるための指導 | カタカナがなくても、英語を音読し、意味につなげられるように、1年生から文字に触れさせ、段階的に英語でのリテラシー能力を育てる指導を行う。 |
| 3 | コミュニケーション活動(話す・書く)、及び読む活動に必要な部分だけを拾って教える構文・文法指導 | 体系的に細部まで学ぶ文法学習ではなく、コミュニケーションの中で使用するための文法を発達段階に合わせて指導する(Be動詞、一般動詞、過去、未来、3単元のs、比較、関係代名詞、完了形など)。 |
| 4 | たくさん読んで理解させる指導 | 子どもの興味と知的レベルに合った教材を用いて、読む機会をたくさん設ける。 |
| 5 | 英語を使う体験・喜びを生むイベント | 毎年9月に「ワールドウィーク」を実施。立命館アジア太平洋大学の国際学生15か国・約30人が全クラスに入り、学校生活を1週間共にする。協定校への語学研修や留学、また、協定校からの訪問交流なども実施する。 |

1～5の結果として、英語や異文化(自文化)を学ぶことへの意欲、動機づけに結びつく。

*立命館小学校提供の資料を基に編集部で作成

動は、聞く、話す、読む、書くという様々な力を伸ばすことにもつながる。

子どもの状況の把握も大切だ。

「1時間目の授業と給食後の5時間目の授業とでは、子どもの集中力はまるで違います。授業で伸ばしたい力を意識するだけでなく、子どもの様子をよく見取り、子どもの好みや時間帯なども考慮しながら、授業を組み立てています」(三ツ木先生)

教材作りのポイント

「表現したい」という思いをいかに活動に組み込むか

教材作りでは、子どもにとって意味のあるやりとりになっているかを重視する(P.28図2)。自分のことやテレビ・新聞で見聞きしたこと、授業で習ったことなど、「本当の情報」であるからこそ、子どもは「言いたい」「聞きたい」と思うのだと、三ツ木先生は強調する。

「日本人の子どもたちをアメリカ出身とイギリス出身のグループに分け

て、互いの出身地を尋ね合う活動をしたところで、子どもの学習意欲を引き出すことはできません。1年生であれば、友だちの誕生日や自分の好きなものを尋ね合う方が意欲を持って活動します。子どもの表現欲求を教員がくみ取り、表出できるような内容にすることが重要です」

また、子どもが学習内容に関心を持てるようにするため、時期に適した内容にする工夫をしている。同時期の他教科の学習内容と関連性を持たせたり、クリスマスの前であれば



写真1 1年生では、自己紹介をしながら自分の名前を書いたName Cardを交換。自分のクラスで練習した後、2クラス合同の授業を行った。

欲しい玩具と want を用いた表現を取り入れたりもする。

学年間の連続性という観点では、一度扱った内容を、設定を変えたり新しい語彙を加えたりしながら、何度も登場させる。例えば、1年生で野菜の名前を覚えたら、2年生ではカレーのお気に入りの具材を考える活動で復習し、3年生では京野菜の名前を新たに学習し、理科で学習する植物の内容を絡ませて、深く考えられるような内容にするという。

「子どもが既に持っている知識や言葉を使いながら、その周辺を広げていく学習内容にしています。バリエーションが増えれば、次に違った形で出てきても、自分なりに推測し、また自分の言葉で何とか伝えようとするようになります」(三ツ木先生)

同じ内容でも、表現方法を徐々に難しくして、表現力を高めていく題材もある。例えば、「自分の小さい頃を紹介する」場合、過去形を学ぶ4年生では、教員自身の話を聞いて選択肢の中から語彙を選ぶ活動を行って文章に慣れた後、次のステップとして、自分自身について空所補充形式で単語を書き込む。中学1年生では、子どもの頃をテーマにした英作文を書くといった具合だ(図3)。中学校で書くことが急に増えないよう、少しずつ積み重ねている。

このような考えの下、教材は作られているが、目の前の子どもたちの知識や経験、関心の変化をつかむ努力をし、さらには、時事や流行も取り入れながら、教材の内容は常に見直しているという。

英語に関する特別活動

「本物に触れる」ことが学習意欲を高め、力を伸ばす

学習した英語を授業以外で使う体験や喜びを生むイベントも数多く設

図2 教材づくり 5つのチェックポイント

| | | |
|---|--------------------------------|---|
| 1 | 自分自身についての内容か | 自分のことを話すとなると、内容を真剣に考えやすい。高学年になるほど、人と少し違うことを言いたいという欲求も生まれ、それが伝えたいという意欲につながる。 |
| 2 | 本当の情報か | 仮定の内容を基にした活動だと、どうしても不自然になり、子どもはしらけるだけ。学習意欲も湧いてこない。 |
| 3 | 他教科の学習内容や季節に合った内容など、時期的に適しているか | 子どもが同時期に他教科で習ったことを題材にすると、関心が湧き、知っていることを言いたくなる。また、季節的に話題になる事柄を取り上げると、興味が向きやすい。 |
| 4 | 「その会話、やりたい!」と感じさせることができるか | 子どもが「やりたい」と思えば、主体的に取り組み、定着も期待できる。○分以内、○人とやるなど、タスクを加えると、目標が明確になり、意欲も高まる。 |
| 5 | 不自然な状況を無理に設定していないか | 「飛行機の中」など、無理がある設定では、子どもは必要性を感じず、単なる遊びになりやすい。外国の人々と通じ合うための英語を学ぶ場となるような活動内容にする。 |

*立命館小学校提供の資料を基に編集部で作成

図3 教材の展開例

小学4年生

中学1年生

↓

小学4年生

→

小学4年生

→

小学4年生

*立命館小学校提供の資料をそのまま掲載

「自分の小さかった頃」では、教員自身の話を聞き、聞き取った語彙を選択肢の中から選ばせる。次に、教員の例を参考に、子ども自身の情報を書き込ませる。選択肢を与え、使いたい語彙を選ばせて完成させる。中学1年生は、教員の例文を参考に、自分で英作文をする。同じテーマでも、それぞれの段階に応じたステップを設けることで、活動の幅は広がる。

けている。最も特色ある活動は、毎年9月に行う「ワールドウィーク」だ(写真)。これは、同じ学校法人の立命館アジア太平洋大学(APU)*1の国際学生約30人が、児童宅にホームステイをしながら小学校に通い、1週間、児童と共に学校生活を送る

というものだ。国際学生の出身国は、アジアやアフリカ、東欧、南太平洋地域などの15か国にも上る。

「国際学生には自国の文化や生活を紹介してもらい、自分の夢も語ってもらいます。国費で留学している国際学生も多く、国を背負って立つと

*1 大分県別府市にキャンパスがある。学部生約5,600人のうち約2,600人が国際学生であり、約80か国・地域から留学している。教員の約半数も外国籍。

*2 科学技術や理科・数学教育を重点的に行う高校を支援する事業。 *3 国際的に活躍できる人材育成を重点的に行う高校を支援する事業。

写真 世界15か国、約30人と学校生活を送る「ワールドウィーク」



- ①文化交流会では、国際学生が民族衣装に身を包み、舞踊や民謡などを披露。
- ②国際学生は各クラスに入り、子どもと一緒に授業を受けたり、特別講師になったりする。5年生の社会科では、国際学生が出身国と日本との輸出入品についてプレゼンテーションをして、貿易についての理解を深めた。
- ③国際学生を兄のように慕う子どもも見られるという。

いう志の高さに刺激を受ける子どももいます。まさに、多様な文化、様々な思いを持つ人に触れる1週間になります」(蔭山副校長)

期間中には、6年生が3～4人のグループとなり、国際学生を案内する「京都deガイド」も行う。国際学生の質問に答えられるように調べ学習をし、事前に英語の原稿を用意する。この活動は国際学生に大変好評で、子どもにとっても自分が住む町をよく知る機会になっている。

このような「本物に触れる」方針は、立命館中学校・高校にも貫かれている。特に、高校は、文部科学省「スーパーサイエンスハイスクール」*2、及び「スーパーグローバルハイスクール」*3の指定校として課題研究を行っているため、その成果を海外の高校生に英語で発表し、質疑応答をするという機会が多い。小学校から培ってきた英語力をまさしくツールとして活用する場面であり、そうした活動の積み重ねが、英語学習の動機づけとなっている。

小・中・高連携の体制

小・中間の教員異動で、学習歴と英語力を把握

最後に、小・中・高の連携体制について見ていこう。

立命館小学校、立命館中学校・高校では、12年間を発達段階に応じた4-4-4の3ステージに設定して、カリキュラムを組んでいる。英語教育では、セカンドステージとなる小学5年生～中学2年生の接続を大切にしており、中・高の教員が小学校での指導内容や、英語力の定着具合を把握した上で、指導に反映している。連携を始めた頃は、中学校の英語科教員が小学校に異動して高学年を受け持ち、児童の中学校進学に合わせて教員も中学校に持ち上がり異動するという体制を採っていた。

「最も大事なのが、教員間の連携です。ノウハウが蓄積された今は、校種間の異動は減りましたが、小・中・高は互いによく授業見学をしますし、教材も共有しています。中学校教員

から、小学校での指導内容への問い合わせもあります」(蔭山副校長)

三ツ木先生も、教員同士が連絡を密にすることが大切だと話す。

「例えば、小学校では文法事項を扱いますが、体系立った指導はしていません。子ども自身は『分かっている』と思っけていても、中学校の教員にとっての『理解している』というレベルに達していないことがあります。『～ができています』といっても、捉え方が小・中・高の教員で異なるからです。そのような食い違いをなくすためにも、直接の対話が必要です」

今年度は、英語教育の共通の指標として、12年間のCAN-DOリストをCEFR*4に基づいて作成している。

「指導ノウハウのなかった小学校では教員間で目標を共有するCAN-DOリストが必要でした。連携が進むにつれ、指導法が確立していた中・高でも4技能の目標を文章化し、12年間の指導の体系化を目指しています」

開校以降、独自の英語教育を積み重ねてきた立命館小学校。今後の課題の1つは、カリキュラムと教材のさらなる見直しだ。開校当時と異なり、民間の幼児英語教室などが増えたことにより、入学前に英語を学ぶ子どもの割合が増え、現在はそれに応じた指導の見直しを進めている。また、2015年度には小学校の1期生が高校を卒業し、小・中・高の連携はこれからが真価を問われる。

「先日、高校生が小学校で行った特別授業で、小学校で英語を学んだ経験は自分にとって大きな財産になったという話を聞き、流暢な英語でスピーチをする姿を見て、感慨深い思いを抱きました。私たちの指導の成果は、中学校、高校と進学した生徒が物語ってくれます。その姿を励みに、これからも指導を改善し続けたいと思います」(三ツ木先生)

*4 ヨーロッパ言語共通参照枠 (Common European Framework of Reference for Languages) の略称。学習指導教材の編集、外国語運用能力の評価などのために、包括的な基盤を提供するものとして、2001年に欧州評議会が発表。A～Cごとに2レベル、計6レベルが設定されている。